

中国語の擬声語・擬態語論について

——日本の場合——

安 本 武 正*

Onomatopoeia and Mimesis in Chinese

——in case of Japan——

Takemasa YASUMOTO

一

小文は中国語の「摹状」を中心にして論じた『中国語の擬声語・擬態語論について』（八戸工業大学一般教育部『研究会誌』第10号1986. 3, 以下これを『摹状』と言う）のつづきである。従って、小文は片方ではやはり『摹状』の冒頭で触れた二つの「なぜ」という疑問を問うものであるが、また同時に片方では日本で論じられている中国語の擬声語・擬態語論の具体的な分析を行なうものである。分析する素材はこれもまた『摹状』の冒頭に触れた二書一論文（『摹状』の「一」を参照）であるが、今回は新に中国語学研究会『中国語学事典』（江南書院1985. 1, 以下『事典』と言う）と望月八十吉『中国語と日本語』（光生館昭和56年7月再版訂正本）、瀬戸口律子『日中両国語における擬音語・擬態語について』（大東文化大学紀要〔人文科学〕第20号昭和57年3月, 以下『日中両国語』と言う）の二書一論文をつけ加える。

小文の中心は日本で論じられている中国語の擬声語・擬態語論の具体的な分析にあるのであるが、その前に次の作業を行なう。日本語の擬声語・擬態語と中国語の摹状を定義・名称・オノマトペアなどの点で比較し、その相違点などを明らかにして、日本で論じている中国語の擬声語・擬態語論の問題点を指摘する。また、日本で論じられている中国語の擬声語・擬態語論

は主として語彙論において論じられているが、中国では修辞学において論じられているので、この解明を通じて日本での中国語擬声語・擬態語論の論法の問題点をも指摘する。以上の作業から得た結果と先回の『摹状』と、この二つの裏付けをもって、小文が問題としている日本で論じられている中国語の擬声語・擬態語論についての分析を行なう。

二

『摹状』で触れた『中国語語源漫筆』（以下『漫筆』と言う）、『日本語・中国語対応表現用例集 II—擬声・擬態語』（以下『用例集』と言う）や、また今回新につけ加えた『中国語と日本語』、『日中両国語』などが中国語の擬声語・擬態語を述べるために取っている手法は、それを直接中国語の例文や語彙から論じるのではなく、逆に日本語の擬声語・擬態語から中国語のそれらを取り出している⁽¹⁾。『漫筆』はまず先に草野心平『第八月満月の夜の満潮の時の歓喜の歌』の語句「ぐりりに、るる、ぎやつ、ぎやるるる」などを引用し、それから王景春『採煤』の中国語の「丁噹、嘩啦」などに触れている。『用例集』は小林多喜二『蟹工船』をはじめ十二の日本文学作品とその中国語訳から、いわゆる中国語の擬声語・擬態語の例を取り出している。この点はその「採取作品」の一覧と『用例集』全体を見て